

潤中町遺跡の発掘調査成果

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. 立地

当該遺跡は、潤地頭給遺跡の南東部に位置し、雷山川西岸の微高地上にあたる。潤地区遺跡群は2.3～5mの低地帯に分布するが、この地区は標高が周囲よりも幾分か高い位置にあり、最高所では6mに達し、洪積台地上に立地するなど周辺と比べると居住環境としては好位置にあるといえる。古くは「中小路」と呼ばれ（註1）、隣り合って存在していた「東小路」、「西小路」（いずれも地名としては消失）とともに潤集落の中心エリアを形成していたと考えられる。

これまでに、2地点の発掘調査が行われている。

2. 第1次調査

(1) 調査にいたる経過

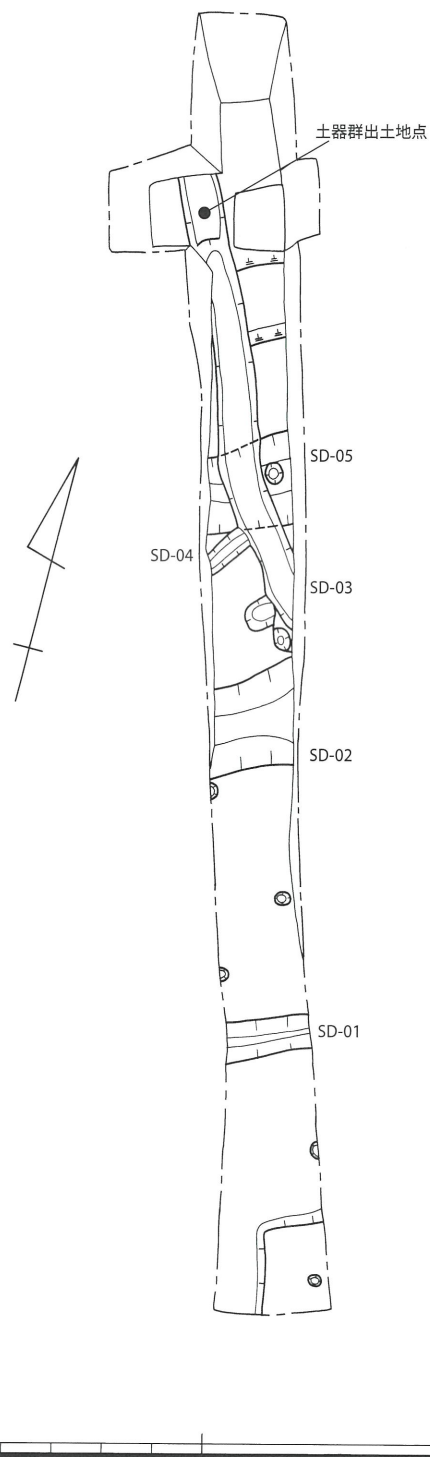
最初の発掘調査は、平成5(1993)年に現在の東風小学校の南東隅角から市道を挟んだ対面(30頁第1図)で行われた。現雷山川の土手からは西80mに位置する。当時はまだ一帯が水田として利用されていたが、この地で宅地造成が計画されたことから、予定範囲のうち道路予定部分について、筆者が担当して3日間の緊急発掘調査を実施し、溝、柱穴などの遺構を確認した。

(2) 調査区の概要（第1図）

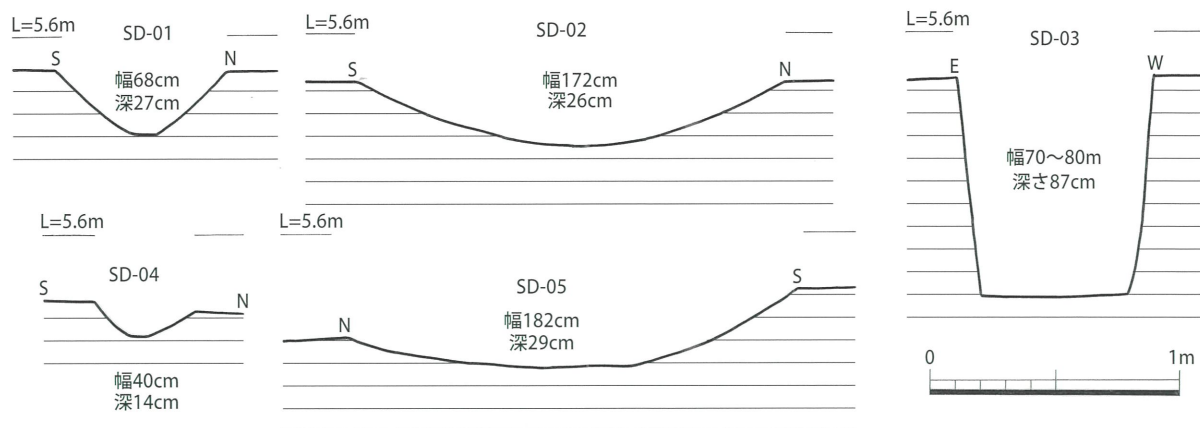
南北長25.8m、幅2mの細長い調査区を設定し、水田耕作土・床土を除去すると、黄褐色斑粒を含む沖積台地を検出した。台地は南から北に向かってなだらかな下り勾配で傾斜しており、北端では、窪地に繋がっていた。

なお、北に隣接する潤地頭給遺跡では、Ⅳ区の南東部(Ⅳ区)でも窪地が確認されており、今調査地点は、この窪地の南岸に相当するものと考えられる。

検出した遺構は、調査区を南東から北西方向に斜めに縦断する弥生時代終末～古墳時代初頭の溝1条と、東西方向に調査区を横断する時期を異にした5条の溝を確認した。



第1図 潤中町遺跡1次調査地点遺構配置図(1/150)



第2図 潤中町遺跡溝断面図 (1/30)

また、小柱穴も検出したが、建物等の具体的な構造物等を復原できるものではなかった。

(3) 遺構各説

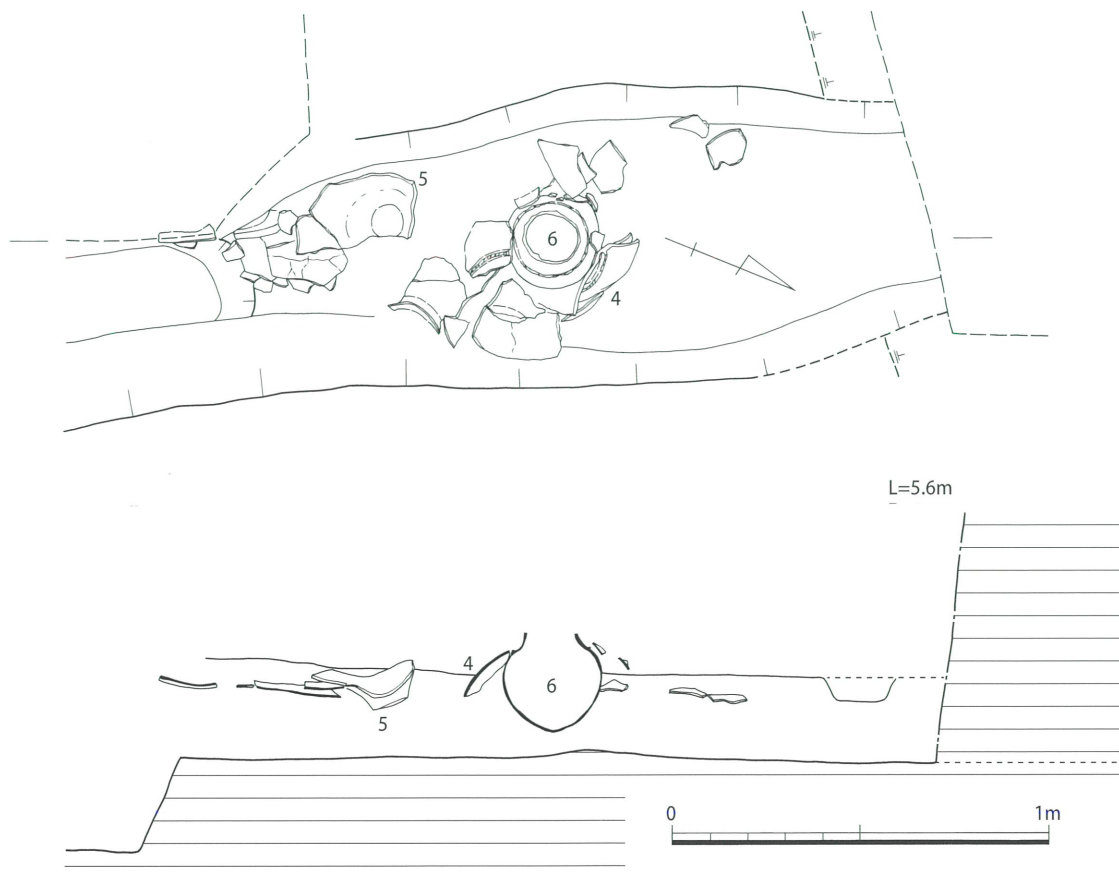
SD-O1

調査区南端から5mの地点で検出した東西方向に延びる溝で、現状の延長方向は概ねN-67°-E方向にある。幅66~80cm、深さは25cmほどで、断面はU字形を呈する。出土遺物はないが、

埋土は灰色粘質土であつたので、中世以後に掘削されたものと推定される。

SD-O2

調査区の中央を東西に横切る幅1.7~2.05m、深さ30cm余りの断面が浅いU字形を呈する溝で、見た目の延長方向は概ねN-59°-E方向にある。溝は黄色土のブロックを含む灰色粘質土層が埋没した後、灰褐色土層が新たに掘りこまれていた。



第2図 潤中町遺跡SD-O3土器出土状況 (1-20)

SD-03

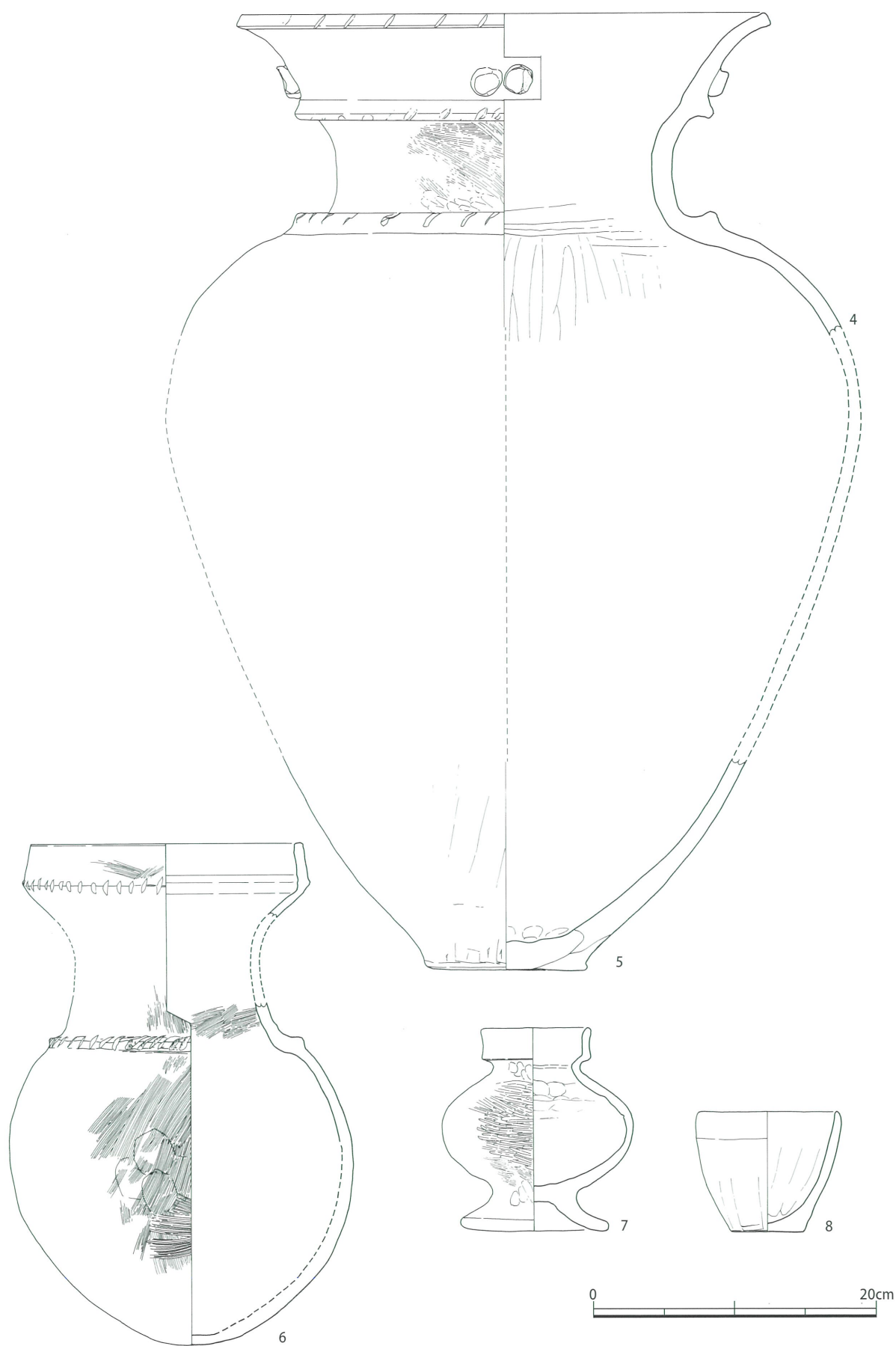
調査区の中央から北西方向に斜めに横切る幅70～90cm、深さ80cmほどを測る深いコの字形を呈する溝で、途中で若干北向きにわずかに屈

曲している。壁面がほぼ垂直に掘削されており、溝幅に対して深く掘削されていることが特徴である。溝の延長方向は概ねN-24°-Wである。

溝は台地の北端から法面まで続きさらに北に調



第3図 潤中町遺跡SD-03出土土器実測図① (1/4)



第4図 潤中町遺跡SD-O3出土土器実測図② (1/4)

査区外まで延びていた。

法面に係る地点では、溝底が30cmほど段をつけて高くなり、上段面から土器が一塊となって出土した。口頸部を打ち欠いた複合口縁壺を溝の埋土中に据え、その上に大型二重口縁壺の上半部だけを覆い被せるように据えたとみられるが、上に置いた土器は大きく破損して周囲に落下・散乱していた。

周囲からは、打ち欠かれた複合口縁壺の口縁部、大型壺の底部、甕、大型壺の破損片などが出土しており、出土地点から10mほど北には窪地があって、溝はそこに流れ込んでいることから、溝ないしは水にかかる何らかの祭祀行為が行われたことが推測される。埋土から骨角器、石器も出土している。

出土遺物（第3～5図、巻頭図版3b）1～3は、甕である。1は、倒卵形の胴部から口縁部にかけてなだらかに外反して収束するもので、口唇部は丸く収める。底部は立ち上がりが丸みをもち稜が鈍くなるものの、辛うじて平底を保っている。高さ29.9cm、口縁径17.2cm、胴部最大径23.5cm、底径3.4cmを測り、外面はタテハケ調整で、肩部にナメハケを施して仕上げているのが特色である。内面はケズリを基調とし、ナデ、指押さえ調整が施される。色は暗灰褐色を呈する。

2は、胴下部から底部にかけてが失われているが、残存高28.5cm、口縁径19.3cm、胴部最大径24.3cmを測る。胴部には粗い反時計回りの螺旋タタキの後にタテハケで仕上げたことが認められ、内面は横ハケが施され、器壁は薄い。

3は、大型の甕で口縁部が鋭く「く」の字状に屈曲し直線的に反転する。口唇部は断面「コ」の字形で小口の外縁に刻みを施す。胴部は倒卵形を呈し、肩はわずかに張り出す。底面はやや平底かがってはいいるが、丸底に仕上げる。内外面とも全面ハケ調整を施すが、外面底部は最後に板状工具による擦過で仕上げている。高さ39.8cm、口縁径29.0cm、胴部最大径は32.7cmを測る。

4は、大型二重口縁壺の胴部肩から口縁部にかけての部位で、口縁径は39.4cm。現存高は23.4cmを測る。器壁が厚出で平均1cm以上となり、二重口縁の外面には、2個で一对とする厚さ1cmほどのぶ厚い円形浮文が四方に貼りつけられている。また、口唇部と擬口縁、また頸部下端

にめぐらされた突帯刻み目が施される。

5は、大型壺の底部である。平底で径11.6cmを測るが、周縁はややあまく丸みをもち、胴部は斜め上方に立ち上がるが、上方に向かうにつれて徐々に内湾気味しながら続いている。

調整は、内外面とも指押さえと板小口による縦方向のナデが認められた。底部断面の粘土の接合痕をみると、当初は尖り気味の丸底にした成形し、後に輪台状に粘土を継ぎ足して、最終的に平底に成形している。

4と5は、ともに胴中央部が残存していないため、確実に接合するとは確認できなかったものの、出土地は近接し、色調、胎土が酷似し、器壁の厚さも似かよっていることから、同一個体である可能性が高いと判断した。また、底部から胴部にかけての立ち上がりが直線的であることから、長胴の大型壺と推定される。

6は、複合口縁壺である。胴部は、二重口縁壺の下に据えられており、口縁部下から頸部にかけて打ち欠かれていたが、溝内から出土した口縁部がこれと同一個体と推定され、概ね器高は36cmほどと推定される。

倒卵形の胴部からカーブしながら頸部に連なるが、胴部と頸部の境にはやや大振りの刻み目を施した三角突帯がめぐる。

口縁部は擬口縁から内側に向けてわずかに内湾ぎみに直立する。擬口縁の屈曲部には刻み目が施される。

7は、SD-O3流路の上層から出土した脚付複合口縁壺である。短く大きく外反する脚台の上に球形の胴部を持つ短頸の複合口縁壺が載る。擬口縁から直立した

8は、鉢である。口縁径9.9cm、底径5.2cm、高さ8.7cmを測る。若干外側に膨らみ加減で口縁に向かって開きながら立ち上がり、器壁は厚手で端部は丸みをもって仕上げる。

9は、鹿角製の骨角器とみられ、器表面は荒れて剥落しているが、所々に黒色の顔料のような塗膜状の付着物が認められ、また、木口的一端には黒色の付着物上に赤色の顔料の付着も認められる。現存長7.6cm、径は、概ね2.3～2.7cmほど。中心に幅1.2～1.4cm、深さ7mmほどの溝を設ける。重さは26g。刀子などの柄であろうか。

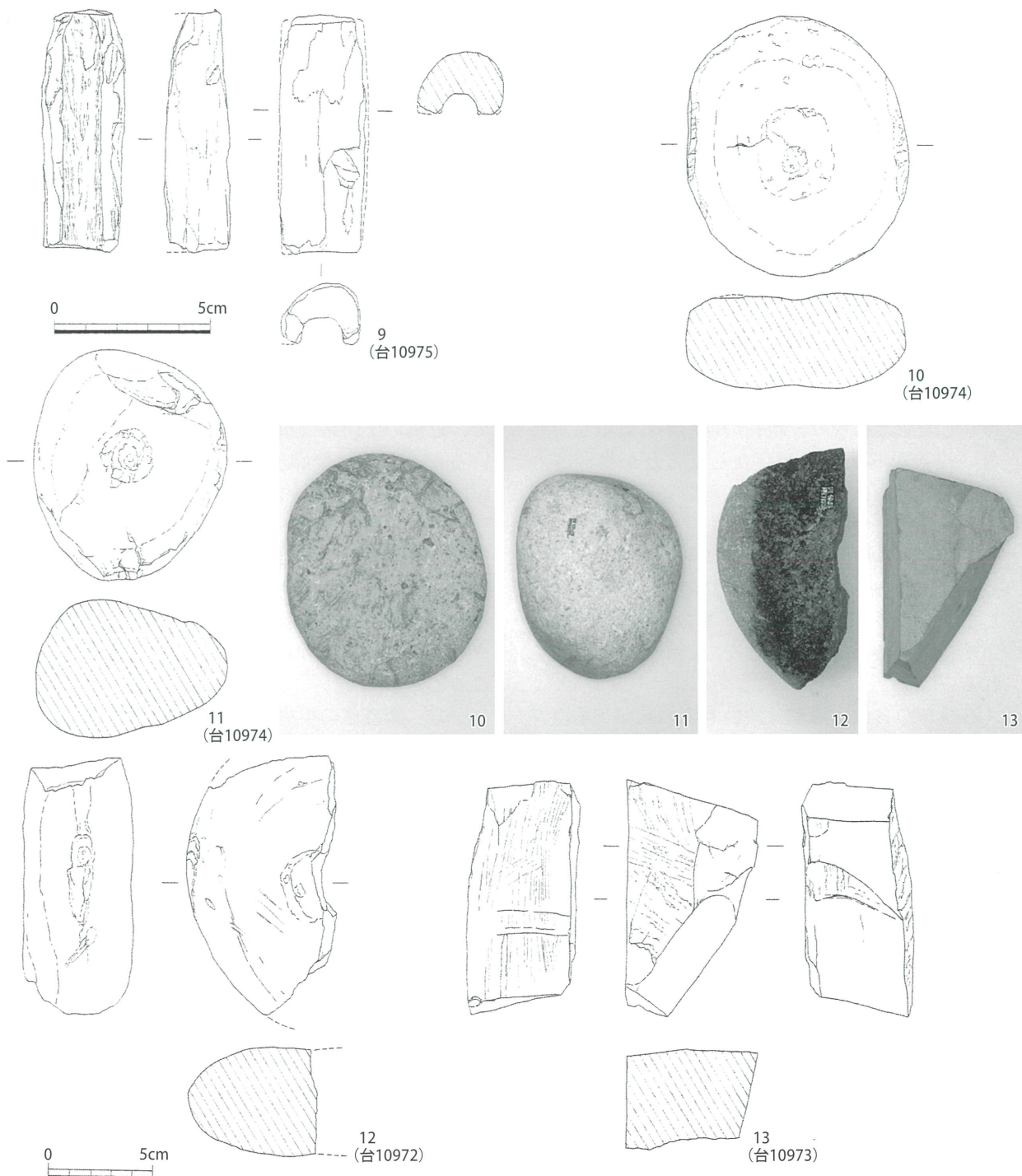
10～12は叩き石である。10は、平面は楕円

形を呈し、長さ12.5cm、幅10.7cm、厚さ4.8cm、重さは1076gを測り、扁平な表裏面の中央に握りの安定を図るために浅い窪みを穿っており、側面には使用による巧打痕が残る。安山岩とみられる。11は、長さ11.1cm、幅9.3cm、厚さ6.7cm、重さ946gを測り、細く尖る側縁部と先端部には、使用に伴う巧打痕が残る。花崗岩製である。12は、半折しているが、側縁部に巧打痕が認められ、表裏平坦面の破損面側に窪みが残存していることが

ら叩き石であることがわかる。表面は焼けて黒く変色している。現存長12.5cm、幅7.2cm、厚さ5.4cm、重さ714gである。安山岩とみられる。

13は、粘板岩質の角石で表裏面に擦過研磨等の2次調整による平滑面が形成されていることから砥石の半製品と推定される。

現存長11.1cm、幅6.7cm、厚さ5.1cm、重さ524gを測る。



第5図 潤中町遺跡SD-O3出土骨角器・石器実測図(1/3 (台)の数字は博物館台帳番号)

SD-04

調査区の北端から11m南で西壁側からSD-O3に向かって直交方向に注ぎこむ幅50cm、深さ15cmほどの断面U字形の小溝である。SD-O3とは明瞭な切り合い関係は認められず、SD-O3と同時に機能したものと推定される。

SD-05

調査区北端から8mの地点で、SD-O3と直交する溝で、幅1.5～1.85m、深さは30cmほどを測る。埋土は灰色粘質土であり、延長方向はSD-O2並行していて断面の形状も逆台形を呈するなど似ている。延長方向はN-63°-Eを測る。

(4) 第1次調査の所見

調査地点は、冒頭に述べた通り潤地頭給遺跡とは市道を挟んで南東隣接地に位置する。潤地頭給遺跡の調査では東縁部は窪地があり、その南東に当該調査地点が位置するものとみられる。窪地の底面近くから弥生中期の祭祀土器の溜りが検出されており、上層では、奈良、平安期の土器片も採集されていることから、長期にわたりこの窪地が存在したことになり、現在の地形からは推し量れない複雑な凹凸地形が存在したことが推測された。同様の現象が潤地区の広範囲にみられることから、今後とも注意を要する。

SD-O3の北端では窪地に向かって下り勾配となり、段を伴い、さらに北に向かって深みを増していたことから、位置的にみて潤地頭給遺跡南東端の窪地に向かって流れ込んでいたものと推測される。

SD-O3は、溝幅は狭いものの断面が垂直方向に深く掘削されているのが特徴である。

類似する断面形状を有する溝は、隣接する潤地頭給遺跡の弥生終末～古墳前期の住居群内からも確認されており（註2）、周囲が湿潤な土地環境であることを考慮すると、周囲の地下水位の上昇を未然に防ぐことを意図したのではないかと推測される。

SD-O3北端近くでまとまって出土した土器群は、打ち欠きを施した大小2体の壺を重ねて据え置いた状態で出土しており、溝底から浮いた位置での出土していることから、この溝が埋め戻されるなど、その機能を失う時点に行われた祭祀に

伴うものであろう。

埋土から、叩き石と砥石が複数個体まとまって出土したことも注意される。これらについて出土状況の詳細を記録できなかったのが惜しまれるが、12以外は、使用が可能な状態を保っており、通常の遺棄とは性格を異にする。

北に隣接する潤地頭給遺跡では、弥生時代終末～古墳時代前期にかけて営まれた大規模な玉作り工房群が営まれており、これに関連し、当該地区近辺においても玉づくりに関わる集落が展開していた可能性がある。調査地点では玉作りを想定できる直接的な遺物の出土はないが、SD-O3の形状は、玉作り工房群中にめぐらされた溝と類似することなども考慮するとその可能性は高い。

また、上記の土器祭祀につながる祭祀行為の一環として溝に遺棄された可能性も想定する必要があるだろう。遺棄直前の叩き石の用途にも関わる課題もあり、これらを念頭に今後の周辺調査を行う必要がある。

出土土器のうち、1は北陸系の土器と考えられ（註3）、大型の二重口縁壺は、外反する口縁外面に2個一対の円形浮文を四方に配するのが特徴で、近畿の庄内系二重口縁壺の影響を強く受けているが、胴部は倒卵形で平底を呈し、復元高は60cmを超える大型品である。

さらに頸部と胴部の境に刻み目を施す点は在地的で、外来系の諸要素を取り込みながら、在地で製作されたものと考えられる。この土器を在地の複合口縁壺の上に重ねて行なわれた祭祀がどのような意図のもとに行われたのか、興味ひかれるところである。

一方、調査区の中央で検出した東西方向に並行して延びるSD-O2、SD-O5は、断面の形態が潤地頭給、古屋敷、番田遺跡などで確認されている中世～戦国期の環濠に似ていることから、これらと同様に屋敷などの区画溝の一部である可能性もある。こちらも面積が極めて限られた中での調査成果であるため、今後の周辺における調査成果と合せて検証したい。

註

1. 糸島郡教育会『糸島郡誌』1927

2. 江野道和 江崎靖隆「工房を巡る溝」『潤地頭給遺跡』2005 前原市教育委員会

3. 久住猛雄氏から御教示いただいた。



第6図 潤中町遺跡第2次調査地点遺構配置図 (1/125)

3. 第2次調査

(1) 調査の経過

平成7（1995）年に民間の集合住宅の建設が計画されたため、緊急で発掘調査が行われた（註1）。その後、出土資料の整理が行われ、担当者による実測が行われているが、現在収納先が不明となっており、博物館への移管は完了していないため、資料の写真撮影はできなかった。今後、改めて資料の保管場所を確認するなどの作業が必要である。

(2) 調査区の概要

雷山川から西へ100mほどの地点に位置し、調査着手前の現高は7mほどを測り周辺よりも一段高くなっていた。また、近隣では珍しい赤褐色ローム土からなる洪積台地上であった。

南北長22m、幅13mの長方形に調査区を設定して調査が行われ、表土直下から柱穴、溝、土壇などが検出された。出土した遺物の内容から、弥生中～後期、鎌倉時代の遺構が主体を占めるものと推定される。



第7図 弥生時代の遺構と配置図 (1/250)

(3) 弥生時代の遺構と遺物

1号掘立柱建物

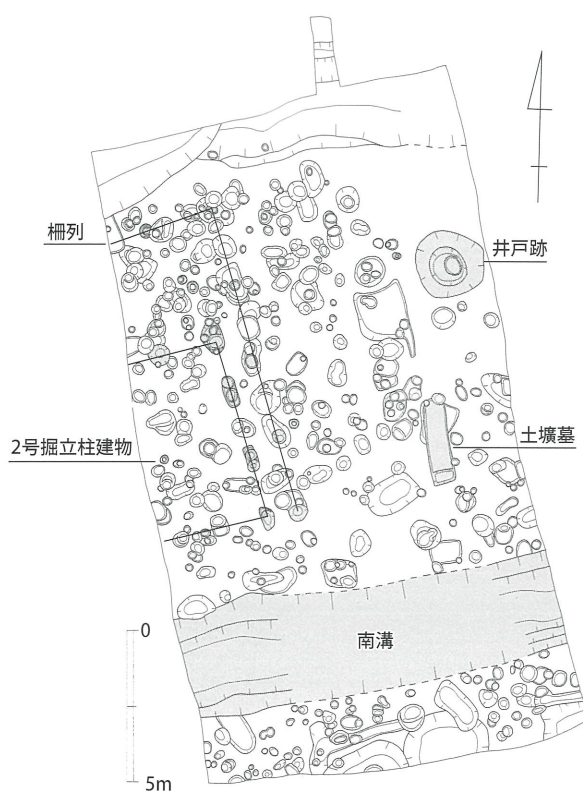
調査区北寄りで確認した2間×2間の総柱の掘立柱建物で主軸はN-21°-Wにとり、桁行5.1m、梁行4.45mを測る。

柱穴から時期を絞り込める良好な遺物は出土していないが、弥生中期の土器片が出土していること、柱穴の掘り方はいずれも大きく平面は隅丸方形や不正円形を呈し、掘り方が大きくかつ深いことなどから弥生時代の掘立柱建物と推定された。

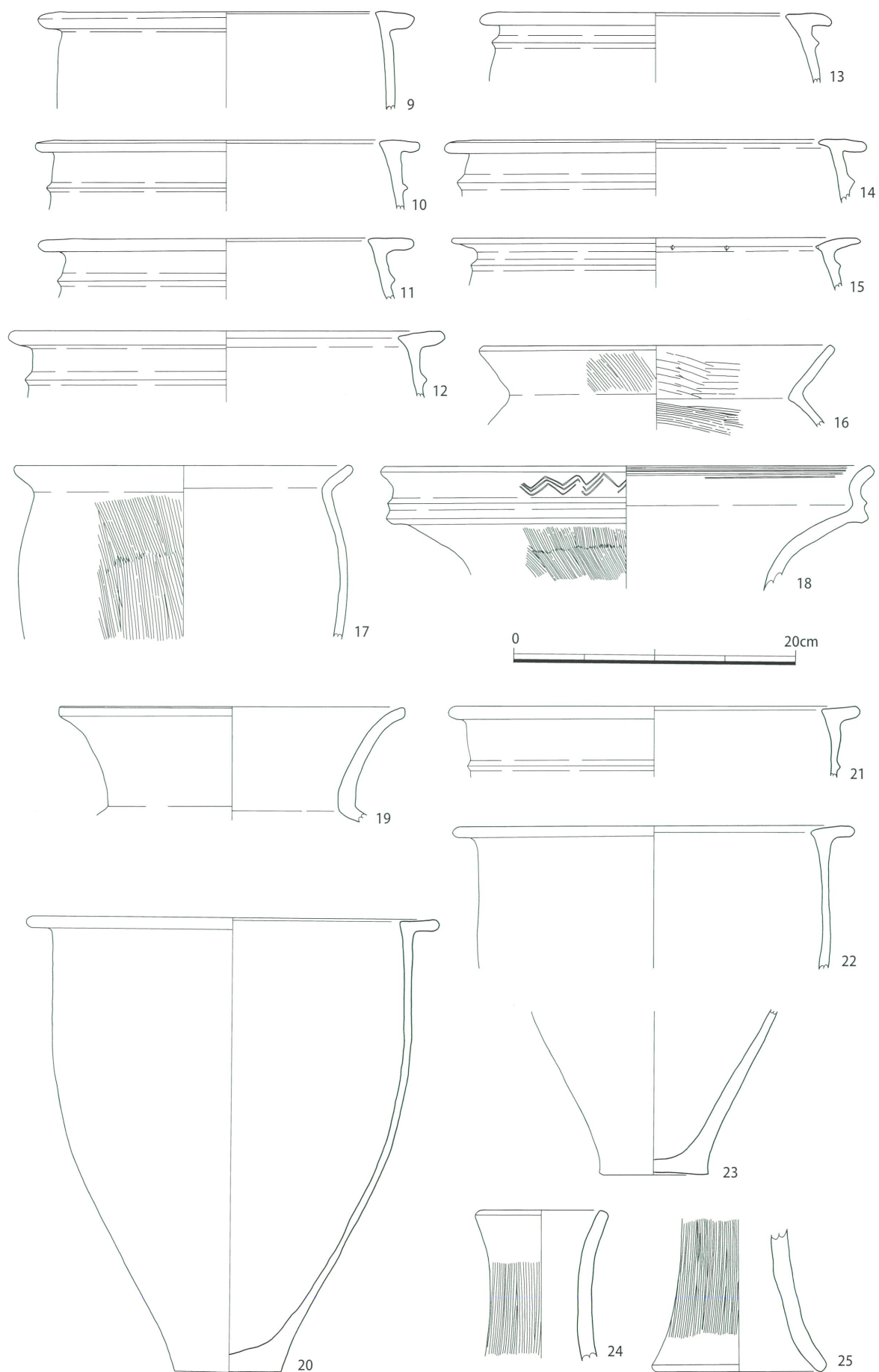
北溝

調査区北端で北に延伸した小トレンチ内で東西方向に延びるとみられる溝状の遺構が検出されており、幅1.2m、深さ40cmほどを測り、断面は逆台形を呈しているが、詳細は不明。

埋土中から弥生中期～後期後半の土器が出土しており、後者に埋没したものと考えられる。



第8図 鎌倉時代の遺構配置 (1/250)



第9図 潤中町遺跡第2次調査出土弥生土器実測図 (1/4)

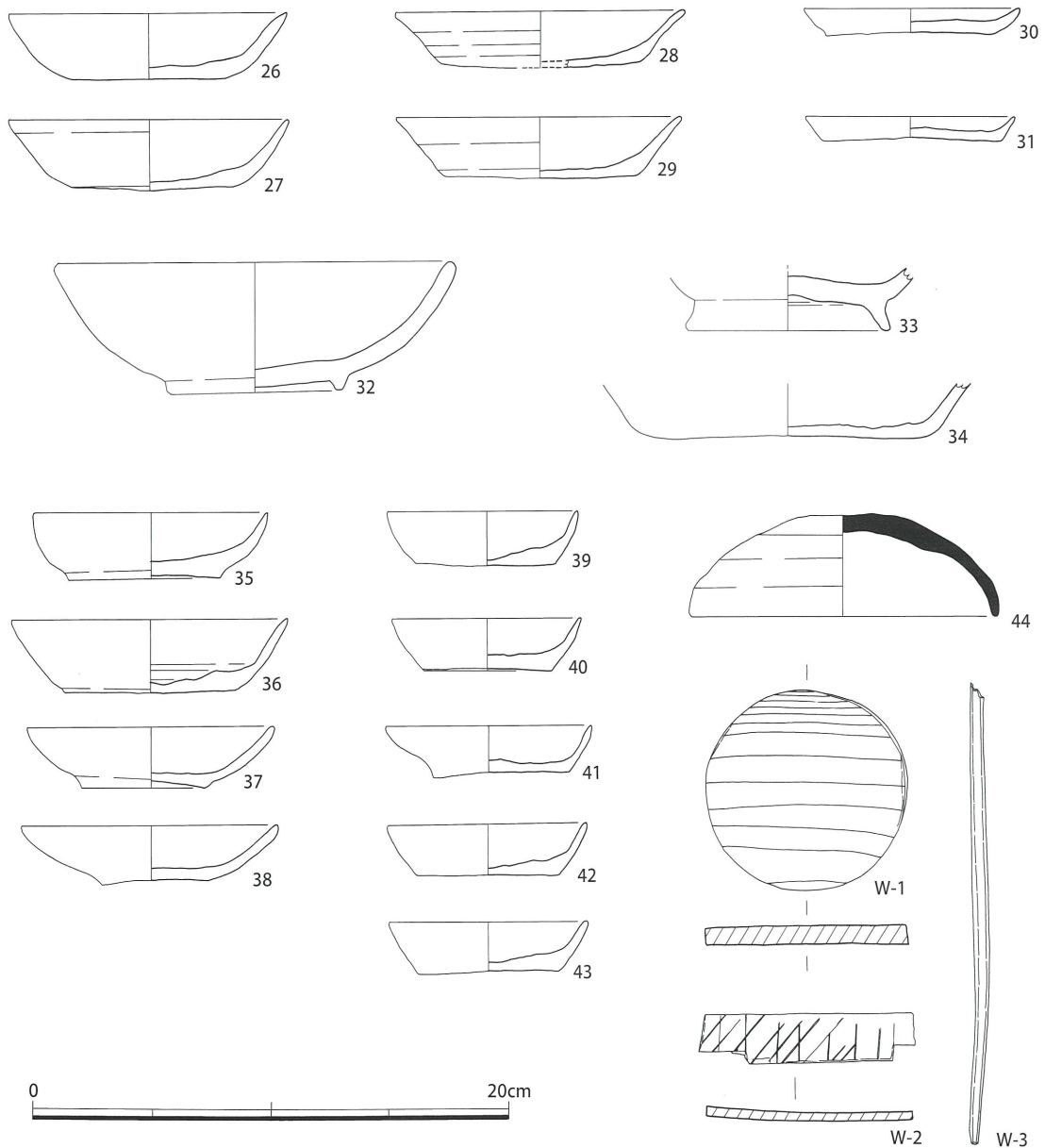
出土土器（第9図） 9～18、20～23は甕である。9～12、20～23は逆し字に屈曲する口縁で中期後半、17は、甘くの字状に外反する口縁を持ち、後期前半、16は鋭くくの字状に外反するもので後期後半のものである。18は大型の複合口縁壺の口縁で、口縁の立ち上がり下部に三角突帯がめぐり、その上に三条の沈線で描かれた連続鋸歯文がある。

その他の遺構・遺物

1、2号掘立柱建物群と重なるように径20～30cmの柱穴が径10mほどの円内に集中して検出された（第11図）。現地では詳細な検証は行われていないものの、弥生中期の土器片が多く採集されていることから、当該期の竪穴住居が切り合いながら存在した可能性がある。

(4) 鎌倉時代の遺構と遺物

2号掘立柱建物



第10図 潤中町遺跡第2次調査地点出土遺物実測図（1/3）

調査区の中央から西壁にかけて検出した建物跡で建物の西柱列は調査区外におよぶものと推定される。桁行3間×梁行2間（+α）で桁行長6.1mを測る。柱穴は桁行方向に長楕円形に掘削されており、東柱穴列では抜き取り痕とみられる円形の小穴も認められる。

柵列

2号建物の東から北にかけて建物を囲むように配された柱穴列で、柱間間隔は2.5cmで並ぶ。2号建物に伴う柵杭列と推定される。

土墳墓

2号掘立柱建物の南東角から東に4.5mの地点で検出した南北長2.95m、幅75cmの長方形土

墳で、主軸はN-10°-Wに向かう。調査時にはPit135と標記され、土坑と判断されたが、南端が一段深く掘り添えられており、小口板を埋めこんだ痕跡とみられること、また、土墳内から完形の土師器坏、皿が合せて6枚が出土していることなどから、組み合わせ式木棺を主体部とする木棺墓であった可能性が高いと考えられるが、土坑として処理されたためか土師皿の出土状況の記録が一切ないため、詳細は不明である。鎌倉前期（13世紀）の土墳墓と考えられる。

出土土器（第10図26～31）土師器坏4点（26～29）、土師皿2点（30～31）を図示した。坏、皿ともに底部を回転糸切り後にナデで仕上げる。

番号		遺構等	器種	口縁径 (cm)	高さ (cm)	色調	焼成	博物館 台帳番号	備考
1	1	SD-03	甕	18.2	30	明茶褐色	良好	11209	北陸系
2		SD-03	甕	19.4	(28.5)	暗茶褐色	良好	19164	
3		SD-03	甕	29.2	40	茶褐色	良好	19165	
4		SD-03	二重口縁壺	38.6	(69)	暗黄灰色	良好	11210	同一個体か？胴部打ち欠き欠損
5		SD-03	二重口縁壺			暗黄灰色	良好	19162	
6		SD-03	複合口縁壺	19.7	(37.5)	明茶褐色	良好	11206	頸部打ち欠き欠損
7		SD-03	複合口縁壺	8.1	14.7	暗茶褐色	良好	11207	出雲系
8		SD-03	鉢	10.0	8.7	暗茶褐色	良好	19163	
9	2	北溝	甕	27.2	(7.0)	茶褐色	良好	—	
10		北溝	甕	28.0	(5.1)	茶褐色	良好	—	
11		北溝	甕	27.3	(4.4)	茶褐色	良好	—	
12		北溝	甕	31.6	(5.1)	茶褐色	良好	—	
13		北溝	甕	25.6	(5.0)	茶褐色	良好	—	
14		北溝	甕	30.7	(4.1)	茶褐色	良好	—	
15		北溝	甕	29.6	(3.8)	茶褐色	良好	—	
16		北溝	甕	25.8	(6.0)	茶褐色	良好	—	口頸部くの字外反
17		北溝	甕	24.4	(12.4)	茶褐色	良好	—	
18		北溝	複合口縁壺	36.0	(8.9)	暗茶褐色	良好	—	口縁外に複合鋸歯文
19		4号土壇	広口壺	25.2	—	明茶褐色	良好	—	
20		4号土壇	甕	29.9	32.8	茶褐色	良好	—	
21		4号土壇	甕	29.8	—	茶褐色	良好	—	
22		4号土壇	甕	29.2	—	茶褐色	良好	—	
23		4号土壇	甕	—	—	茶褐色	良好	—	底径8.0cm
24		4号土壇	器台	9.7	—	明茶褐色	良好	—	
25		4号土壇	器台	—	—	明茶褐色	良好	—	脚裾径12.7cm
26		土壇墓	土師器坏	12.7	2.9	暗茶褐色	良好	—	
27		土壇墓	土師器坏	12.9	3.2	暗茶褐色	良好	—	
28		土壇墓	土師器坏	13.2	2.6	暗茶褐色	良好	—	
29		土壇墓	土師器坏	13.1	2.4	暗茶褐色	良好	—	
30		土壇墓	土師皿	9.9	1.1	暗茶褐色	良好	—	
31		土壇墓	土師皿	9.8	1.0	暗茶褐色	良好	—	
32		井戸	黒色瓦器塀	18.2	6.0	薄灰黒色	良好	—	
33		井戸	黒色瓦器塀	—	—	淡杯黒色	良好	—	
34		井戸	土師器坏	—	—	淡杯黒色	良好	—	
35		南溝	土師皿	10.7	3.0	暗茶褐色	良好	—	
36		南溝	土師皿	12.5	3.2	暗茶褐色	良好	—	
37		南溝	土師皿	11.2	2.9	暗茶褐色	良好	—	
38		南溝	土師皿	11.7	2.6	暗茶褐色	良好	—	
39		南溝	土師皿	8.7	2.4	暗茶褐色	良好	—	
40		南溝	土師皿	8.4	2.4	暗茶褐色	良好	—	
41		南溝	土師皿	9.3	2.2	暗茶褐色	良好	—	
42		南溝	土師皿	9.1	2.3	暗茶褐色	良好	—	
43		南溝	土師皿	9.1	2.2	暗茶褐色	良好	—	
44			須恵器坏蓋	14.1	4.7	青灰色	堅緻	—	

第1表 潤中町遺跡第2次調査地点出土土器観察表